サッカーにおける高校年代の育成環境の違いによるライフスキル獲得の決定要因

－筑波大学蹴球部を例に－

犬飼 翔洋（筑波大学）

１．目的

本研究では、「全国高等学校体育連盟チーム（以下：高体連）」と「J リーグ下部組織チーム（以下：ユース）」に所属した大学生選手を対象に、サッカーにおける高校年代の育成環境の違いによるライフスキル獲得の決定要因を調査する。

２．方法

本研究では、予備調査と本調査の 2 種類の調査を行なう。まず予備調査では、島本・石井（2006）が作成した日常生活スキル尺度を用いたアンケート調査を行い、高体連出身選手とユース出身選手が獲得してきたライフスキルにどのような違いがあるのかを量的に確認する。分析には IBM SPSS Statistics を使用し、統計的に分析する。次に　本調査では、筑波大学蹴球部のトップチームの選手を対象に、学年ごとのフォーカスグループインタビューを実施し、予備調査で得られた結果を質的に検証する。分析には KH Coder 3.0 を活用し、コーディングを用いた分析を行なう。

３．結果と考察

予備調査における量的検討では、これまでに獲得してきたライフスキルは、リーダーシップ、計画性、情報要約力、自尊心において、ユース出身選手の方が高体連出身選手より有意に高い結果となった。また、本調査における質的検討では、学年による違いはあるものの、予備調査と同様にユース出身　選手から高いライフスキル要素がオープンコーディングによって生成された。

まずリーダーシップについては、チーム指導者および指導法の違いが選手のリーダーシップや主体性に影響を及ぼしたと考えられた。次に計画性では、進路選択が結果に大きな影響を与えたと推察された。ユース出身選手は、トップチームへの昇格が果たせなかった際に自身で他の進路選択を探求するものの、高体連出身選手は指導者から学業の両立を説かれる傾向が強いことから、計画性に影響の違いが出たと示唆された。なお、情報要約力については、両者共に優位性が認められなかったが、自尊心については、競技力の差が結果に影響を及ぼしていたことが浮かび上がった。一般的にユース選手のプレー技術が高く、サッカーにおいて好成績を残していることから自尊心の高さが優位に働いたと考えられた。

本調査では、学年毎に差はあるものの、コーディングによって導き出された概念から、おおむねユースと高体連の特徴的な違いがライフスキル獲得に影響を及ぼしていた。特に、指導者、指導法、環境面、指導内容、競技レベル等で特徴的な差異が認められたが、なかでも、競技レベルの違いが大きな影響を及ぼしていた。ユース出身選手が高いライフスキルを獲得しているのならば、類似した方法論で高体連出身選手もそれと同様、あるいはそれ以上のレベルを目指せば、同様の効果が得られると感じられた。一方ユース出身選手は、現段階で高体連出身選手よりも有意に高いライフスキルを獲得しているっものの、ライフスキルの全て網羅しているわけではない。その為、選手の将来性を鑑みて社会に必要なライフスキルを獲得させるには、ライフスキル獲得要因を考察した取り組みを考案することが求められるだろう。

４．結論

本研究の目的である、サッカーにおける高校年代の育成環境の違いによるライフスキル獲得の決定要因は、指導法の特異性、複数社会で生きる教育的意義の違い、競技レベルの優位性の 3 点であり、選手のその後の人生選択や思考にも大きな影響を及ぼしているものと結論付けられた。

５．主な参考文献

１）島本好平・石井源信（2006）大学生における日常生活スキル尺度の開発.スポーツ心理学研究,54:211-221

２）島本好平・東海林祐子・他（2013）アスリートに求められるライフスキルの評価.スポーツ心理学研究,40(1):13-30